

ました。あのクラスはいやだ、もう学校には行きたくないと何度思ったかしれません。どうしても行きたくなくて、学校を休んでしまったこともありました。でも、体の具合が悪いわけではないのに、学校を休んでいるのはとてもいやでした。休んだ後、私を心配してくれて少しクラスが変わっているかなど期待して登校しても、全然変わっていませんでした。

その度に、やっぱり来なければよかったと思いました。死んでしまえば誰にも何も言われぬ、と何度も思いました。でも、父や母を悲しませると思うとできませんでした。

いじめを受けて、家に帰って何回も泣きました。自分がいじめられて初めて、小学校の時いじめてしまった人の気持ちが変わりました。あの人も、こんなに我慢していたんだなと思いました。とてもひどいことをしたと後悔しました。

あの頃、心穏やかに過ごした日は、いじめの中心になつてゐる男子が、市内大会でいなくなつた日だけのような気がします。その日は給食の時間も静かで、いつもこんなだつたらいいのになと思ひました。ゆつくり給食を食べながら、その時ふつと思ひました。私っていつも何も言わないで我慢しているけれど、これでいいのかな……。私のつらい気持ちを誰にも言ったことがないけれど、話せば分かってくれる人がいるかもしれない……。それから数日後、私は思いきつて小学校のころ仲良しだった友達に相談してみました。話を聞いた友達が最初に言ったのは、

「ごめんね。知つてたのに。私、何もしてあげられなくて。」という言葉でした。何とかしてあげたい思つていたけれどできなかつた、自分と同じように思つている人が他にもいると云うのです。そして、どうしたらいいか一緒に真剣に考えてくれました。友達は、

「今の気持ちを作文に書いて、みんなに話してみたら。」とすすめられました。

「先生にも相談しよう。きっと力になつてくれるはずよ。」と云つて、一緒に先生のところにも行つてくれました。

話をよく聞いてくださった先生は、次の日の学級会で、私のために特別に時間をとつてくださいました。私は、昨夜おそくまでかかつて書いた作文を読みました。それは私が今まで胸の奥にあつた気持ちを正直に綴つたものでした。

クラスの空気が温かくなつてきたのはそのころからでした。外はもう梅の蕾がふくらみ、私のながかつた一年も終わろうとしていました。



(小野澤桂子)

私はこれでいいのか

「なんかきたない。」

それだけの理由で、私が一人の女の子をいじめてしまったのは、小学校五年生の時でした。いつも同じ服を着ていて不潔だな、たったそれだけで、みんなでその子を避け、仲間はずれにしたのです。その子は、休み時間もひとりぼっち、帰る時もひとりぼっちでした。どんなにつらく寂しい思いでいたか、痛いほどわかる時が私にもめぐってくる時は、その時は思いもませんでした。

それは、期待に胸はずませた中学校生活のスタートから始まりました。入学式の次の日、登校した私が席に着くと、となりの席になった男子が、私を避けるように座るのです。机もわざと離れているようです。そして、休み時間になると、同じ小学校出身らしい男子と一緒に、私の方をチラチラ見ながら何か話しているのです。四つの小学校から来て、四分の三は知らない人たちのいるこのクラスで、いじめがありそうないやな予感が胸をかすめました。気にしないようにしようと思いましたが、でも、日がたつにつれて、その男子だけではなく、他の男子まで私を避けるようになってきました。給食をもらいに行く時など、汚そうに私から離れていきます。配膳係になって、給食を男子の机に置いたら、ある男子は泣き出してしまいました。私が持つていった給食には、バイキンでもついているというのでしょうか。男子にはもう絶対配膳してやるものか、と思いました。

教室掃除の時、私がしかたなく男子の机を運ぶとその机の男子は露骨にいやな顔をします。そして、周りの男子も、

「あつ、きたねえ。」

といって、その男子をからかうのです。

ある日の数学の時間、指されて答えようとしたら後ろから男子が消しゴムを投げてきました。私に命中した時、女子までが一緒にになってげらげら笑いました。先生は気づかなかつたらしく、いぶかしげな顔でこちらをみただけでした。私は笑われている自分がみじめで、ただじつと下をむいているだけでした。涙がにじんできたけれど泣いたらよけい笑われると思つてぐつと我慢しました。

自転車の鍵をかけられてしまつて、家に帰れなくなつたこともありました。部活動が終わつて帰ろうとしたら、ふだんかけたことのない自転車の鍵がかかっているのです。暗い中どこかに鍵が落ちていないかと必死で探しました。先生も来てくれて、一緒に探してくれましたが見つかありません。しかたなく、母が会社から帰る時間まで待つて家に電話をかけ、スペアキーを持つて来てもらつて帰りました。次の日、友達も、いつも私をいじめている男子が自転車置き場で何かしていたと教えてくれたけれど、はっきり見たわけではありません。あわされるでしょう。私は、何も言いませんでした。

音楽や英語の時間も、グループ練習になると、私の隣には誰も座つてくれませんでした。その度にもじめでした。家に帰つても、明日また学校だと思つと、気持ちが暗くなり

「やった。さ、早く戻ろう。」

面倒くさい回収後の区分けや後始末も、圭子は早く終わりたい一心で陽子と積極的に手伝っていた。その圭子の耳に、

「あれ。明雄たちがいないよ。」

「先生、明雄たちがいないよ。」

「だれか知っている者いないか。だれが一緒だったんだ？」

「さっきまで居たんだけど、家へ帰ってしまったんじゃないのかな。そうだ、そういえば用事があるから早く帰りたいて言っていたな。」と、無責任な言葉も聞かれた。

「何だ、ずるいな。俺たちはこんなに暑いのを我慢してやっているのに。」

口々に文句を言い出した周りの声に圭子は思わず「あの……」

「と言い出しそうになる声を飲み込んだ。」

あの時、「そろそろ戻ろうか。」と言う班長の声を合図に戻り始め、ふと振り返った目に明雄たち三人の姿が映ったのだ。

自分の後から帰ってくると思っていたが、そういえば、明雄は「高速道路の近くまで行ってみよう。」と言っていたな。

県道沿いのこの場所ですえこの交通量の多さだ。まして、高速道路に入るカーブはつい一週間前にも小学生が自動車にはねられるという事故があったばかりである。もしも明雄たちが事故に遭ってでもいたら、それで戻る時間が遅れているとしたら……

……私が明雄たちの言葉を伝えれば、先生は「迎えに行ってくる。」ということだろう。高速道路までは片道四十分は有にかかる。往復一時間以上。練習試合の始まる時間には完全に遅刻だ。スタメンからも外されてしまうだろう。みんな紙一重の実力なのだ。新人戦のメンバーからも外されてしまったら……

……「なぜ今頃言い出すんだよ。」「余計なこと言ってる。」と

言う周りの非難の目も耐えられないなと思う。幸い、明雄たちは家に帰ったと思われている。もしかして、本当に帰ってしまったかもしれないのだ。圭子は何度も自問自答を繰り返した。

夏の太陽がじりじりと照りつけて来る。体操着の下は汗びっしょりだった。

《 資料前半 》

(4)

「だまっていよう。」圭子がそう思ったときだった。

「あれ、明雄たちだ。」

「あいつら帰ったんじゃないんだ。」

「すごいや、あのゴミ袋を見ろや。」

圭子の目にも信号待ちをしている明雄たちの姿が目飛び込んできた。三人は両手に抱え切れないほど詰め込んだゴミ袋を

それぞれ肩に担いで運んで来た。心配気な表情だった担当の先生もほっとしたように声をかけた。

「よっ、サンタクローズ達。遅いからみんな心配していたんだぞ。みんなが一生懸命働いている時に帰ってしまったらと思ってる、担任に連絡しようと思っていたんだ。それにしてもすごい空き缶だな。頑張ったな。」

「心配かけてすみませんでした。でも、高速道路の下は前から通学していても気になっていたので、三人では拾いきれない空き缶の山だったけど、頑張って袋に入れられるだけ入れてきました。」

運んで来たゴミを区分け始めた明雄たちの顔からは、玉のよ

うな汗が流れ落ちていた。

(矢代 とみ子)



(1)

夏休みに入つての第一日曜日。今日は、地区別全校奉仕作業の日である。午前八時。今年の夏の暑さは格別で、その暑さの中、O団地から通学しているM中学生約百名がグループごとに集合場所に集まつて来た。

私はM中の二年生。近所の陽子と集合場所に急いでいた。

「暑いねえ。こんな日の奉仕作業つてつらいよね。」

「うん。あまり暑くないうちに終わるといいね。部活もあるし。何時から？」バレー部に所属する陽子に尋ねた。

「私は今日は午後から。圭ちゃんは？」

「バスケットは十一時からだけど、今日はY中との練習試合が入っているし、それにこの奉仕作業が終わったら、アトム of 散歩と食事の世話をしなければならぬんだ。」

今朝、布団の中にいた私に会社勤めの母が

「アトム of 散歩昨日も怠けているわよ。自分が犬が欲しいと言つて飼つてもらつたんでしよう。食事もちちゃんとやつてから部活へ行きなさいよ。」

と、いくぶん厳しい調子で言い捨てて出掛けて行ったときの言葉が思い出された。(やること沢山だな。全く。) 心の中で母の言葉に文句を言つていたとき、陽子が尋ねた。

「新人戦はどう。でられそう？」

二年生の部員が少ないバレー部の陽子は、春の総体でもフル出場して活躍したのだった。それに比べ私たちバスケット部は、三年生が引退した現在、二年生だけでも十二人。スターティングメンバーは五人。そのポジションをめぐつて二年生全員がいま必死になっている。私はセンターをねらっている。しかし、競争相手は二年生ばかりでなく、後輩の一年生の中にもでてきている。(がんばらなくっちゃ。アトム of 世話をして、早く学校

へ行こう。)

(2)

七時五十分ギリギリまで布団の中でねばり、体操着に着替えて出て来てしまった圭子は、朝食もとつていなかった。

「各プロックごとに集合してください。」

三年生の生活委員の係の言葉にみんなは動き始めた。それでも仲間同士の会話は絶え間ない。一年生、二年生、三年生ごとに各場所のゴミを収集することになった。圭子たち二年生は、高速道路に向かう県道沿いを中心に実施するよう指示が出た。八時というラッシュアワーの時間帯のため、歩道の脇を自動車 that 猛スピードで走り抜けて行く。近年、高速道路の開通と共に交通量が急速に増え、それに伴い、スピードの出し過ぎによる交通事故も増加の一途をたどつていた。

「車の量が多い時間帯だから、二年生の場所は特に気をつけて作業をしよう。」

と、担当の先生からの注意の後、それぞれの分担区域に散つて行った。

県道ということもあり、結構いろいろなものが落ちていた。それを、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミ等に区分けながら拾い集めた。三十分も経つた頃には、圭子の額や陽子の額から汗が吹き出していた。朝食をとつてこなかった圭子にとって暑さの中の奉仕活動はだいぶこたえた。

(3)

やがて「そろそろ戻ろうか。」と言う班長の声が四く五メートル後ろから聞こえた。

(続けること・・・)
「ここにどんな意味があるのだろうか。」
ひとつのことを、やり続けていくこと。

ある人には、何でもないことかもしれない。また、ある人には、そんなもの何もないよと言われるかもしれない。以前に、次のような話を聞いたことを思い出しました。

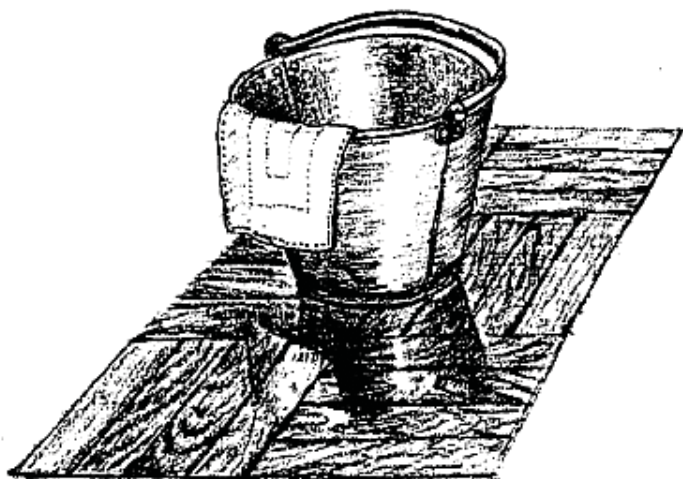
ある日、昇降口から出ようとしたら、ちりとりとほろほろと並べられているのを見つけた。それまでは、あっち向きだったり、置きっぱなしといった状況だったので、それはひとつの発見でした。次の日も、また次の日も、同じ様子が見られました。不思議なことに、こんなことがあつてからというものは、昇降口の掃除は一段とみがかかり、大変きれいになっていったのです。その年さらにすばらしいことが他の場所でも見られました。それは、階段掃除とトイレ掃除です。ある階段掃除当番の生徒は男子二名でした。その生徒は男子バスケット部に入っていた生徒でしたが、その長身にもかかわらず、体を大きく曲げ、上の段から下の段まで一段ずつ、それはもう、もくもくとぞうきんがけをしていました。二学期になっても、その生徒は同じ場所を掃除していました。それは三学期になっても続いたので、トイレ掃除の生徒も同じでした。冬の寒い時も、必ずぞうきんをしぼり、足のひざを曲げ、床のタイルをみがいでいたということでした。

掃除。こんな毎日のなにげないことが、こんなにも輝き、一人一人の姿のすばらしさを感じさせてくれたものはありません。「続けること、本物になる」といつか、朝会で校長先生が話されたことを思い出しました。このことは、掃除ばかりではないはずですが、

教室掃除で、教室という作品をつくっていくように、きれいにすることが作品づくりであることにちがいはないのだけれど、その「作品づくり」は、実は自分づくりなのではないかと考えるようになったのです。それは、よく先生がおっしゃっていた、誠実さというひとつのことを気持ちよく行おうという、自分の生き方づくりなのかもしれない。

今、ぼくは、どんなことを大切にして続けていると言えるのだろうか。
へたでもいい、自分なりの一つ一つの作品づくりを大切にしてみたい。

(鈴木 裕)



掃除は 作品づくり？

この中学校では、仕事は自分からとるといふことから、掃除の分担当所も自分で決め、自分で選択して決めたところを継続的に取り組んでいくというやり方をとっています。

ぼくは、教室掃除を分担していますが、なかには、毎日ただほうきをぶらぶらさせているだけで、まじめにやっているとさえ思えない人もいます。でも、特にその人に言葉をかけようとも思いません。確かに、今までにも何度も言葉をかけようとは思ったけど、結局そのままにしています。これは、ぼくの弱さかもしれない。ぼくはというと、ただ黙っててもくもくと自分の仕事をやるしかありませんでした。

ぼくは、一年生の時からトイレ掃除と教室掃除をかわるがわる分担としてきましたが、ぼくだけって確かに手をぬいてやってしまったこともあります。しかし、ぼくは自分の仕事をできるだけ精いっぱいやることを自分への責任のように思っていてやってきたつもりです。ある時、担任の先生が、

「掃除は、一つの作品づくりだよ。」
と言っていたことを思い出しました。どういふことだろうと考えました。

「こんな毎日の、それも掃除することが、なんで作品づくりなんだろうか。」と。
ある日のことです。ぼくが教室掃除を終え、バケツの水を捨てに行く途中、

「また、まじめにやってみようよ。」
こんな言葉を返されたこともありました。

また、ある時は、
「ねえ、今日ね、〇〇さんたらね、授業中にこんなこと書いてたの……。」

「なにそれ、ほんとなの……。」
手にほうきを持ってはいるものの、次から次へ、話はなかなかとぎれないといった人たちもいました

「時間がなくなるから、早く終わりにしよう。」
という先生の言葉にも、

「また、いつもうるさいなあ。」
「どうせ、またよごれるんだから同じじゃないか……。」

とつぶやく人もいました。
こんな日は、そうきんが床に落ちていたり、ごみもあまりはかれないで、ところどころにたまったままでした。毎日のことだから、時々はめんどうくさく思うこともあるかもしれないけど……。

掃除をやることに、一体どんな意味があるのだろうか。先生が言っていた「掃除は、一つの作品づくり」といふ言葉には、どんな意味があるのだろうか。それとも、それは言葉だけのきれいなことを言っているにすぎないのだろうか。



員で遅くまで話し合った。

三日目。朝、各クラスで体育祭実行委員が「生徒主体の体育祭を成功させよう。」と呼びかけた。練習では学年やクラスごとの種目練習も加わりクラスによってはまとまりや主体性が見え始めた。しかし、開会式の準備体操のような全体練習では手足が動かなくなる生徒が出てきてしまう。不安はつり僕たち実行委員の顔つきは厳しさを増してきた。

そんな思いを抱いたまま、体育祭当日を迎えた。吹奏学部の演奏による音楽が流れて入場行進が始まった。「今日は本番。」三年生も気合いを入れてがんばってくれよう。不安も大きい期待を胸に僕は行進した。

開会式が始まり、体育祭実行委員長挨拶、校歌斉唱・・・と式は進んでいった。クラスによって行進への取り組みや校歌斉唱の声の大きさに違いはあったがまずまずの出来であった。午前中の競技や種目も体育祭実行委員の生徒が中心になり運営して滞りなく進むことができた。そして午後の種目になった。午後は男女の混合種目である。ここまではクラ

スの得点差はそれほどついていない。各学年とも自分のクラスのため一致団結して種目に取り組んだ。

いよいよ最後の種目。学年オープンのみ力デ競走となった。この種目は得点が大きくこれにより順位が決まる。どのクラスの生徒も顔つきが違ってきた・・・七〇〇人の生徒のかけ声一つになった。いよいよスタート。「ピーピッ・いっちに、いっちに。」

そうして体育祭が終わった。閉会式では僕のクラスは総合成績で準優勝し友達の目には涙があった。それでも僕にとっては心残りの多い体育祭だった。それは、あの時こうすれば良かった、もっと自分にできることがあったのではと悔やむことも多いからである。しかし、今振り返ってみれば反省も多かったが、少しずつ満足感というか、自信というかそんなものが湧いてきたのも確かである。

(内野 宗長)

最後の体育祭

「生徒中心の体育祭を行う。」これが体育祭実行委員の今年の大きな目標である。

僕は体育祭実行委員長。先生方を頼りに計画から運営まで行っていた体育祭しか知らない僕。「生徒中心の体育祭って・・・。」どうすれば、全校生徒七〇〇人をまとめることができるだろう。いや、実行委員の力だけで、果たして体育祭を成功させることができるのだろうか。よし、やってみよう、という気持ちよりも、不安な気持ちでいっぱいになった。

いよいよ体育祭の練習が始まった。

入場行進。僕の不安は的中した。手足の動きはバラバラ、列もそろっていない。周りの友達とおしゃべりをしている人さえいる。全くやる気がなく、ただ、だらだらと歩いている、といった感じだった。

僕は焦った。どうすればいいのだろう。「手足をそろえて下さい。隣の人と列を合わ

せて下さい。」

僕は、マイクに向かって夢中で叫んでいた。一日目の練習が終わり、体育祭担当の先生を交えて、今日の反省をした。みんなの表情は暗く疲れていた。

「今日のような練習では駄目だ。」実行委員全員が同じ意見だった。遅くまで話し合いは続いた。話し合いの結果、明日から実行委員みんなで列の中をまわって呼びかけることにした。

二日目。今日の練習のメインは校歌斉唱。指揮の大川さんの手が挙がった。

「すぎのうら」

本当にみんな歌っているのだろうか。こんな校歌斉唱って・・・。学年ごとに歌ってみた一年生、まずまずの声が出ている。二年生、うらうらもう少し大きな声で歌えるといいな。

そして、いよいよ僕たち三年生。僕は耳を疑った。ほとんど声が聞こえてこないのだ。三年生にとって最後の体育祭。僕たちが中心となってやらなければならぬはずなのに・・・。みんなはどんな気持ちで体育祭の練習をしているのだろうか。この日も体育祭実行委

私は、頭の中がまっしろになり、ただ弟を見つめているだけであつた。夜、遅くなって、浩二が遺体となって家に帰ってきた。

話を聞いて、親戚の人たちがたくさん集まつてきた。来てくれた人みんなが泣いている中、涙を必死でこらえながら対応していた母が突然こらえきれなくなって弟にしがみついた。弟の顔をゆすりながら、なお、かすかな寝息を確かめるように、

「浩二。こうじ。こうじ。」

「早く目をさましてよー」

「みんなが来てくれているんだよ、こうじ……」

と、泣きくずれた。私は、

「しつかり、しつかりして母さん」

と、母を支えるように母の肩に手をかけた。その時、私は母の底知れぬ悲しみを肌で感じた。

三日後、お葬式が行われた。弟の学校の五年一組、全員が来てくれた。弔辞がクラス代表によって読み上げられ、弟が飼育委員会に所属していて、うさぎの世話を一生懸命やっていたことや、模型クラブで帆船の制作に熱心だったことを初めて知った。

「さびしくなってしまうたね。」

「浩二はやさしい子だったからなあ。」

などと、会う人々はなくさめの言葉をかけてくれた。その言葉に私はなぜかできる限り平静を装ってこたえていたような気がする。

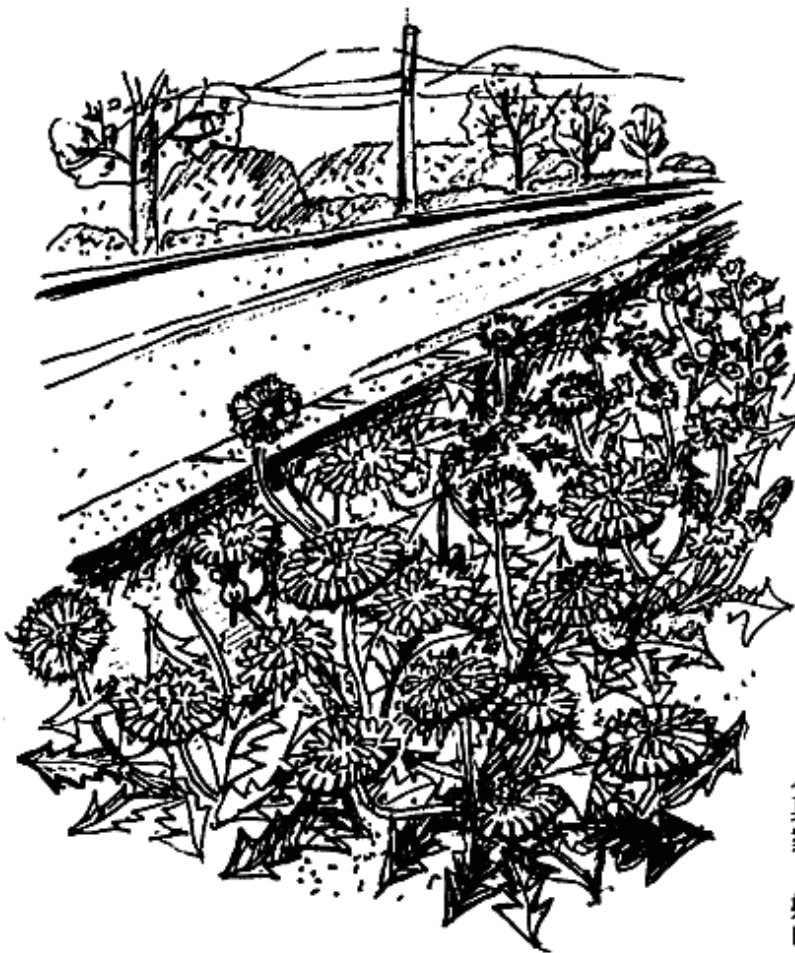
お葬式が終わわり、親戚の人たちも帰り、父と母と私の、三人だけの生活が始まった。弟の遺影を見るたびに、幼稚園の頃、夏になるとセミやカブト虫とりに夢中になり、それらが死んでしまふとお墓を造ってあげていたやさしい弟ばかりが思い出されてなら

なかつた。

また、二人でキャッチボールをしたことや、家族で遊園地や動物園にいったことなど楽しい思い出ばかり浮かんで涙があふれてとまらなかつた。

数日後、弟のリュックサックが届けられた。中には、父と母に買った夫婦茶碗と、私への東京タワーのペナントが、空っぽの弁当箱といっしょに入っていた。

あれから二年が過ぎた。今年も、あの黄色いタンポポの花が、あざやかに咲いている。



(真家 好明)

タンポポの花が咲くころ

今年もタンポポの花が咲く季節がやってきた。私の家から十分くらい歩いたアスファルトの道ばたには、毎年たくさんの美しいタンポポが咲く。今年もタンポポは黄色い花をたくさん身にまとい春の到来を喜んでいるかのようなのである。しかし、私には、美しく咲くタンポポを見るたびに、二年前の出来事がよみがえってくるのである。

忘れもしない二年前の四月二八日。喜びいさんで遠足に出かけていった弟は帰らぬ人となった。五年生になって何よりも楽しみにしていた東京遠足。その帰宅途中に浩二は死んだ。後ろから走って来た白い自動車にはねられて死んでしまった。

あの日の夕方、電話のベルはいつになく大きく鳴り響いた。その日に限って学校から早く帰ってきていた私は、父と母と急いで弟がはねられた現場に向かった。

その時の弟は、顔から血をながし、たくさんのタンポポの花の上に横たわっていた。まだいくらか意識があるのか、

「母さんいたいよ。いたいよ。」

と、かすかな声が聞こえた。父が、

「いたい。頑張るんだぞ。」

と、励ましていたが、耳に入らないようであった。母は、

「浩二、浩二。」

と、泣きながら弟にすがりついて叫んでいた。私は、ただおろおろするだけでなすすべもなかった。そばに弟を車ではねた男の人がぼう然と立っていた。

急いで、救急車で病院に向かった。診察をしてくださった先生は、

「内臓の損傷がはげしいのでどうなるかわかりませんが、最善をつくします。」

と、言って、手術室に入った。私は、手術中の赤ランプだけを見つめ、

「助かりますように……。」

と、祈っていた。母は手を組みずっと床を見つめていた。五時間後、手術が終わった。先生は、

「今は眠っています。全力をつくしました。今日か明日を乗り越えることができればいいのですが……。」

と、おっしゃった。父が、

「助かるのでしょうか。」

とたずねると、

「まだなんとも言えません。」

と、言う言葉が返ってきた。その夜は、父と母と私ですっと夜も寝ないで弟に付き添った。母は、無言のまま弟の手をにぎりしめていた。はりつめた緊張感の中で、弟の体に天井から何本もの点滴がぶらさがり、モニターの画面から心音を示す波形の音だけが部屋中響いていた。それから三時間後、私たちの祈りもむなしく午前四時三七分、二度と目を開けることなく、弟は帰らぬ人になってしまった。

「母さん、いたいよ。」

タンポポの花の上でかすかに動いたくちびるの、あの声が弟の最後の言葉になった。

があふれてきて、最後は言葉にならなかつた。

祖母は二日後に亡くなった。

自宅から連絡を受け、病院に行ったときには人工呼吸を受けており、意識もなく、死を待っている状態であつた。

私一人で祖母を送つた。

父の事故当時から、祖母は父のようすを見に行きたいと言つていたが、会わせても、シヨックを受けるだけだと思ひ、会わせないでいた。入院が決まつた日には自分の死を予期したのだろうか、

「父ちゃんにとうとう会わねんちやつたなあ・・・」

と言つた。

祖母の死後、この言葉は長く私を苦しめた。

父にも伝えづらかつた。父も母も察したのだろうか。父は、

「いっちまつたのか・・・」
と聞いた。黙つてうなずいた。

「そうかあ・・・、いっちまつたのか・・・」
そう言つて、父は口をへの字に結んで目を閉じた。

三人で泣いた。

親の死に目に会えなかつた分、最後の分かれぐらいさせてやりたかつたが、結局、父は、祖母の葬式にも出られなかつた。

父は、翌年の三月の末に退院した。車椅子ごと家の中へあげてやると、

「やつと歸れたなあ・・・」

と、ゆつくりと言つた。そして、

「俺の代わりに、線香あげてくれやあ・・・」

と言つた。

ろうそくに火をつけ、線香をあげた。三本の煙のすじがまっすぐに立ちのぼつた。一年三か月ぶりの父の帰宅であつた。

(古渡 俊明)

父と祖母と。

私の父が交通事故にあい、半身不随となって十年余りの歳月がたっている。しかし、今、思い返してみてもあの頃は、ずい分と苦しい、そしてつらい日々であった。

なかでも、つらかったことは、その父の入院中に祖母を死なせてしまったことであつた。父が重度の身体障害者となつてしまつた時だけにシヨックも後悔も大変なものであつた。

昭和六十年の六月二十五日ごろであつたと記憶している。

その日、妹が離れの祖母を訪ねると、祖母はトイレで身動きができなくなつてしまつていたとのことで、職場に電話があり、休みをもらつて帰宅した。

祖母は舌がまわらず、体が思うように動かなかつてしまつていた。しかし、どこも痛むところははないという。

このころ、母は父の看病でほとんど病院だつ

たし、上の妹は勤めに出ており、下の妹はまだ高校一年生であつた。昼間は祖母の面倒をみるものがないので、私の職場に近い完全看護の病院に入院させようと親戚一同の話し合いの末決まつた。

六月二十九日入院。叔父夫婦、叔母夫婦、親戚のものに付き添われ無事入院を果たした。

身のまわりのしたくをととのえ、ベッドの祖母はみんなと談笑していた。

一時間ほど過ぎた後、帰ろうということになり、叔父が祖母に

「じゃあ、母ちゃん、帰っから。明日また来っかん。」

と、声をかけた。すると祖母は心細くなつたのか、

「みんな、帰っちゃうのかあ。。」

と、まわらない舌で、目をうるませながら返事をした。その声を聞いたら私も思わず、

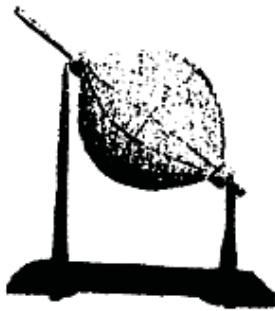
「こんなとこ、早く出っべよなあ、ばあちゃん。早く家に帰っべよなあ。。」と、言つたつもりであつたが、言い終わらないうちに、涙

江戸での修行を終えた墨僊は、土浦にもどって治水工事や農業の指導をおこない、成果を上げた。そのかたわらで、地球儀をつくるため、何度も天体の観測をし、北極星の見える位置や角度から土地の緯度を割り出していった。最初は、失敗の連続で、そのうち多くの借金に苦しむようになった。周りの弟子たちも、

「やめてください。そんなことしたってむだなことでしよう。」

と、せめたてた。しかし、墨僊はあきらめなかつた。そして、数年後、墨僊二十六歳の時、ほとんどの人が地球が丸いことさえ知らない時代に、「傘式地球儀」を完成させたのである。これは、十二本の竹の骨に印刷した舟形の世界地図をはりつけたもので、傘のように折りたたむことができる。

「できたぞーやつとできた。これで、気候や洪水



の予測もできる。この町もよくなる。」しかし、それもつかの間、地球儀の公表に待ったがかかった。墨僊の恩師が忠告した。

「今の世の中は、外国との交わりを禁じてい

る。外国のようすを知らせることも許されない。今、この地球儀を公表すれば、おまえの首はとぶことになるぞ。」

「どうしていけないのですか。作物をつくるのにも日本のためにも役立つものなのに。」
「おまえの気持ちはよくわかる。だが、今はそれが通用しないのだ。しかし、いつか必ずこの地球儀が役立つ日が来るはずだ。」

墨僊の眼に涙があふれていた。当時の鎖国政策に疑問を感じながらも、なすすべもなかつた墨僊は、恩師の忠告に従った。

その後、墨僊は、寺小屋で五百人以上に測量や天文学を教え、一方では、霞ヶ浦や桜川の治水工事を指導した。江戸の天文方からも指導者として呼びがかかったが、墨僊は土浦にとどまった。

黒船の来航により、日本が鎖国から開国へと大きく変わろうとしていた江戸末期、五十六年目にやってやつと傘式地球儀が公表された。この時、墨僊八十二歳。たちまち大評判になり、諸国の大名や江戸、大阪の同好者からの注文が殺到した。また、これが明治以降の科学的発明の基礎となり、後の社会の発展に役立つのであった。

(羽鳥 文雄)

今から二百二十年ほど前の江戸時代、土浦藩の領地では、大雨が降ると霞ヶ浦や桜川がはんらんし、あつという間に田畑をひと飲みした。そのため、米や麦がほとんどとれず、人々は苦しい生活を送っていた。当時十八歳の沼尻墨偲は、こんなようすを見て、暗い気持ちになるのであった。

「これはひどい。はんらんを防いだり、きりぬけるにはどうしたらいいのだろう。」

墨偲は、次第に測量や天文、地理に関心をもつようになった。しかし、勉強したくても、土浦には指導者も書物もない。ある時、墨偲は、病気がちの父に胸の内を明かした。

「父上、わたしは江戸へ出て、いろいろと学びたいのです。そして、この町で困っている人の力になりたいのです。しかし、父上のお体のことを考えると……」

「わたしの体など気にせずともよい。幸いにも江戸にいるわたしの弟は、老中松平定信様と面識がある。あのお方は、おまえに書物や文献などを快く見せて下さるだろう。思うぞんぶん勉強にはげんできなさい。」

江戸に旅立った墨偲は、浅草の天文方（曆

をつくったり、天体観測を行う役所）で、本格的に指導を受けることになった。彼のほかにも地方から夢をいだいてやってきた多くの書生がいた。生まれて初めて見る世界地図。広い海と大小数々の国々。じつとながめていくだけで、まるで外国の人々の声が聞こえてくるようであった。

ある時、天文方の先生が、墨偲にたずねた。「墨偲、おまえは今、どんな書物を手に入れたいと思っているのか。」

「もしかなうのであれば、天文暦学の書物と世界地図が欲しいのです。」

「ほほう、それはなぜじゃ。」

「わたしの生まれ育った土浦に、米や麦が豊かに実って欲しいのです。いつごろどんな具合にもみをまけばよいのか、気候と豊作の関係を天文暦学は解き明かしてくれます。また、気候は、地球が丸いことに関連があると思います。そこで、研究のために地球儀をつくってみたいと考えています。」

「よし、わかった。何とかしよう。」

その後の墨偲の頑張りに、周囲は目を見張るばかりであった。